

鎮魂 シベリヤに眠る父を想う

長久手市岩作早稲田 松原永吉さん

始めに 1945年の夏

終戦の年、私はまだ6歳で長久手小学校1年でした。当時の家族構成は、祖父母、父母、私の5人でした。

連日の空襲で、夜は裏庭の防空壕で米爆撃機B-29の巨体に怯えながら過ごしました。また、西空を見れば、真っ赤に染まり雨の様に降る焼夷弾がキラキラと光る。たとえ様のない光景、これが地獄絵というものか。父の勤めていた三菱の発動機工場（東区矢田町）が、猛火に包まれ瓦礫の山と化したのもその頃（3月23日）でした。幼いながら、もう日本もお終いか、この先どうなるであろうかと、不安な毎日が続きました。これらは、生涯忘れることのできない暗くつらい日々でした。

そして終戦の8月15日、暑く焼けるような日でした。昼の重大な玉音放送とかを聞き入るも、よく理解できず、母から日本が負けて戦争は終わったと聞かされました。祖父母も近所の人もおし黙って顔を伏せたままでした。でも、父が満州から早く帰れるかもと、淡い期待を抱いたことも事実でした。

その後の生活の苦しさは言いようがない。しかし、この地は食料だけは最低限の自給ができ、子供たちも家族の一員として野良仕事の手伝いもし、食べられそうな山菜とりも仕事の一つでした。

その後1、2年の間、戦死された人の葬儀が毎週のようにありました。祖父母も新聞、ラジオの復員者便りの中の父の名を探し続けました。

ある冬の寒い日、たった一枚の公報が届き、それには父の死亡、「ソ連シベリヤ地区で戦病死」と。母がそれを信じたくない気持ちに耐えられずに、肩を震わせながらどっと泣き崩れた姿を私は何時までも忘れられず、幼いながら、どれほど戦争を恨んだことか。

葬儀を済ませた母は、朝から晩まで黙々と働きました。寝る前にいつもこっそりと新聞の帰国者だよりに父の名を探し続け、何時までも縋わぬ望みを棄て切れ無かったようです。

その後、家族、近所の皆さんにも支えられ、苦しく恵まれなかったけれど、明るく少年期を過ごすことが出来ました。

シベリヤの墓参 凍土に眠る父らに会う

戦後47年、1992年。ソ連がゴルバチョフ政権になり、初めてシベリヤの墓参の知らせがありました。高齢の母が、あの僻地に出かけるのはとても無理かとためらうも、本人はこの目で確かめたい、逢いたい思いが断ち難く、会社に5日間休暇を得て決行しました。

父たちが、行先も知らされず送られた、あのシベリヤ鉄道に揺られ2日間、抑留されたという寂しい炭鉱のある町に着き、寝台車を切離し、そこで停泊しました。そこは、バイカル湖の東、見渡す限りの草原で荒れた集落が散逸し、その光景は50年の前と変わっていないと云う。

ボタ山の向うの埋葬されたはずの丘の一本松は、既に朽ちて株だけが残っていました。

凍土の中から

翌日、その草むらをそっと掘ると、かっと見開いた骸が、解けた凍土の中から語りかけました。

「おう、お前たちか。よく来てくれた。これ以上言うまい、一緒に連れ帰ってくれ。そして祖国の故郷でゆっくりと眠らせてくれ。」

やがて、その黒く光る骸の厳しい眼差しが、微かに微笑みけるかのように泪越しに霞んで見えました。

終りに

ここに斃れた千幾百の英霊のご冥福を祈り、後日必ず日本にお迎えでき事をお約束して・・・合掌しました。その後、遺骨収集され東京の国立千鳥ヶ淵戦没者慰霊苑に収められたと聞きます。

今年は、その千鳥ヶ淵へ慰霊に行き、その後を報告して来ようと思います。真の平和の尊さと命の大切さをもう一度見つめ直し、二度と過ちを繰り返してはなりません。昨今の世の動き、特に政治、組織体制の暴走がありはしないか心配です。また、我々には核兵器廃止はもちろん、原発も踏みとどまる勇気が必要な時と思われてならないのです。